

# 小山東助のキリスト教受容

關 岡 一 成

## はじめに

鼎浦・小山東助（一八七九—一九一九）の生涯は三九歳九カ月の短い生涯であった。かれは四〇年に満たないその生涯を歌人・詩人・社会学者・新聞記者・教育家・政治家として過ごした。そして、それぞれの分野で多大の成功を収めた非凡な存在であった。<sup>(1)</sup>それゆえ、小山の人と思想を全体的に理解するためには、かれが活躍したこれらすべての分野から考察する必要がある。

しかし、本稿では筆者の関心が宗教にあり、また能力の限界もあり、とくに小山の宗教思想、わけてもかれの中心を占めていたキリスト教受容という視点から考察することにした。

小山の思想の中で宗教は大きな位置を占めていた。第二高等学校の学生時代から生涯を通してよき理解者であり、友人であり、同じキリスト者であった内ヶ崎作三郎は、小山がさまざまな分野で活躍し成功した人物であるとしたあとで「しかし私は鼎浦君が鎌倉で極めて安静な聖徒のやうな死をとげてから数年を経たる今日に於て、鼎浦君の最大得意の壇場は宗教であつたことを断言する」<sup>(2)</sup>と述べている。

小山のキリスト教受容は、高校時代にキリスト教に触れ、大学時代に受洗し、そのあと八年ほどは平穩であったが、私生活における結婚・病氣などをきっかけに、当時の自然主義思想の影響を受けて動揺し、やがては釈尊に救いを求めるにいたる。しかし、そこでも究極的救いは得られず、再びキリスト教に戻り久遠のイエスを見いだし確信を得るという変遷をたどった。

内ヶ崎が「仏陀より基督へ、或は基督より仏陀への道を踏んだ人は少くないが、鼎浦君の如く紆余曲折して悟道の巡礼を試みた求道の士は寥々として晨の星の如く稀である」<sup>(3)</sup>と指摘するように、日本人のキリスト教受容者の中では特異な存在といえる。

小山のキリスト教受容の変遷は、日本人キリスト者が直面する、キリスト教と日本の諸宗教の統一・調和の問題を考える上でも、重要なことである。

## 一 品性の宗教としてのキリスト教

### (一) キリスト教との出会い

小山は幼児の宗教体験として、母とともに寺参りや墓詣でした記憶を記し、知らず知らずの内に母親の信仰を通して仏教の影響を受けたと述べている。<sup>(4)</sup>さらに、どういふきっかけであったかは記していないが「予は幼にして天主教会の賛美歌を喜び、聖徒の画像を遊び、フランス宣教師の手より黄金色な十字架を与へられて、無意味ながらも之を貴重視し<sup>(5)</sup>」と小学校に入る前にカトリック教会に触れた体験を述べている。

このような宗教体験を持つかが、本格的とはいえないにしても、意識的に宗教とかかわりを持つのは、仙台の二

高に入学してからのことである。

入学前後に「内村鑑三氏の著書に依りて始めて基督教の光明に触れ、痛く其精神に動かされ」たのをきっかけにキリスト教に関心をもった。

二高には、かれが入学する七年前に結成されたキリスト教研究のためのクラブ「基督教青年会忠愛之友倶楽部」があった。この会が主催する講演会に参加してキリスト教の影響を受けたりもした。しかし何と云っても、小山に直接の影響を与えたのはバプテスト教会の宣教師ミス・ブゼル (Buzell, Annie Syrena 一八六六一九三六) のバイブル・クラスであった。

ブゼルのバイブル・クラスは、彼女が来日した翌年の一八九三年に、二高の飯塚啓が彼女に聖書研究をしてほしいと依頼したのをきっかけに、一対一で始められたものであった。それはその後二六、七年間も続けられることになった。このクラスには盛衰があったが、小山が二高に在学した一八九七—一九〇〇年がもっとも盛んな時代であった。

『ブゼル先生伝』に掲載された「明治三十年のバイブルクラス」の写真では、ブゼルを中央に一四名の学生が彼女を取り囲んでいる。学生たちは各所属の分科で優秀な成績の者で卒業後も各界で活躍した人物である。この時代のバイブル・クラスの中心的人物であった栗原基は、ブゼルの書齋に収容できる学生はこれが精一杯であり「これ以外にも熱心にバイブル・クラスに加入を希望する者も少からずあった」が、それ以上書齋に椅子を入れられず入会してもならなかった、と記している。

内ヶ崎や同級生の吉野作造はすでにこの時にメンバーであったが、小山はバイブル・クラスへの参加を希望していたものの、しばらくは入会できなかった。栗原は後年「今から考へると、無理にも仲間入りをさせた方が可かつたと思ふ人々もその中であつた。小山東助氏の如きは吉野作造氏の後を追うて、一年後に加入し、斎藤信策氏も付いて来

た<sup>(11)</sup>」と記している。

小山がブゼルやバイブル・クラスの仲間を通じてもっとも感銘を受けたのは、キリスト教が品性の宗教である、という事であった。栗原は「先生の聖書講義は神学的でも学究的でもなく、徹頭徹尾信仰的であり福音的のものであった。そしてそれは全く先生の人格からの至情溢るゝ言葉であつて、若き心はこれによつて精神的光明と宗教的情操とを与へられた<sup>(12)</sup>」と回顧しているが、学生たちが魅せられたのはブゼルのキリスト者としての人格であつた。ブゼルは当時の多くの西洋人が避暑や保養にでかける夏にも自宅にとどまり「生徒の家庭や、信者の家庭の訪問を始め、其の他病者や不幸な人々を次々と見舞<sup>(13)</sup>」つた。

またブゼルは、当時のプロテスタント・キリスト教が実践していた厳格なピューリタンの信仰生活を強調していた。禁酒・禁煙・純潔・観劇禁止・克己・勤勉などがキリスト教倫理とされた。ブゼルはバイブル・クラスの学生が卒業後、軍隊などで喫煙をするようになった際には、幾度となく手紙を出して禁煙するように戒めている<sup>(14)</sup>。

一八九八年七月三日に行われた、バイブル・クラスのメンバーである内ヶ崎・吉野・島地雷夢の受洗は小山にとつても衝撃的な出来事であつた。とくに島地雷夢の受洗は父親が真宗の高名な指導者である島地黙雷であつたので、社会問題としても注目された。かれは三人の受洗に理解を示しながらも二高時代には、受洗しなかつた。小山にはバイブル・クラスの仲間と同時に仏教研究クラブである道光会の仲間があつた。その中でも熱心なメンバーであつた新潟の寺の住職の子である祥雲確悟とは親しく交わり、たびたび仏教論をたたかかせていた<sup>(15)</sup>。そのような関係もあり、バイブル・クラスの仲間の動向を気にしながらも入信は決断しないまま高校生活を終えた。

(二) 海老名弾正との出会い

二高を卒業した小山は、吉野とともに一九〇〇年九月に東京帝国大学に入学した。吉野が法科の学生になったのに対して、小山が所属したのは文科（哲学科）であった。宿舎は二高の内ヶ崎・栗原・深田康算らの先輩たちが入寮していた本郷の中央学生基督教青年会館であり、吉野も一緒であった。

この基督教青年会館の寮生に、第五高等学校出身で熱心なキリスト者であった三沢糾がいた。小山とは同級生で同じ哲学科の学生であった。かれは熊本時代から海老名と面識があり、上京すると海老名の本郷教会に通った。三沢は熱心に教会に通うと同時に、海老名がその年の七月に創刊した『新人』の編集に参加するようになる。かれは『新人』のために海老名の説教の筆記をするだけでなく、寮生仲間に原稿を依頼した。内ヶ崎・吉野・栗原・小松武治など二高出身の東京帝大の学生が次々と『新人』に原稿を寄せるようになった。<sup>(16)</sup>その内に内ヶ崎・吉野は、東京で所属したバプテスト教会から海老名の本郷教会に通うようになり、のちには転籍するにいたった。

小山も幼天鵲のペンネームで投稿し、教会にも通うようになる。かれは、高校時代にすでに友愛倶楽部主催の講演会で海老名の講演を聞いたことがあり、その時に「<sup>(17)</sup>霊の洗礼を受けた」というほどの感銘を受けていたので、教会生活を通してますます海老名に心酔し、ついに一九〇二年三月二〇日<sup>(18)</sup>に海老名から洗礼を受けキリスト者になった。二才の時である。

小山の受洗は、ブゼル宣教師や海老名の人格や信仰生活からキリスト教の何であるかを学び、またブゼルや海老名の教えを実践していたキリスト者学生の道徳的品性から強い影響を受けた結果によるものであった。

予が眼に映じたる最初の基督教は、全く品性の宗教なりき。予は五六の青年信徒と交りて、その品性の高潔真摯なるに感じ、且つその克己心と自省力との深く鋭きに服したり。一般の学生仲間<sup>(19)</sup>に於て、彼等は独特の光を放てり。彼等は時として信徒ならぬ

他の同窓と、異なる星辰の下に住み、異なる世界の空氣を吸へるかと迄、予をして怪しましめたる程なりき。予は超然として塵を脱したる彼等の品性を敬慕せり、予の基督教會に入りし最初の因縁は是れなりき。<sup>(19)</sup>

小生の基督教に入りしは先輩友人の道德的品性に感じたる結果に候ひき。<sup>(20)</sup>

予は成年の後に於て、深く基督教徒の品性に感じ、此方面より信仰に進みて、神を知り基督を知りせめし。<sup>(21)</sup>

小山は、一九〇三年七月に東京帝國大學を卒業し、九月には島田三郎主宰の東京毎日新聞社に入社し記者生活を送り、その後早稲田大學の講師及び東京日日新聞にも所屬したが、この社会人の七年間も海老名の本郷教會に通い、時には説教・講演も行った。また、『新人』誌とも深くかわり、一卷一二号から一三卷一〇号までにかれが執筆した文章は一〇三篇に及ぶ。<sup>(22)</sup>海老名が海外旅行で社説が書けなかつた時には、代わつて社説を執筆している。また、『新人』が一〇周年を迎えた時の特集号でも、一〇年を振り返つた総括文を書いたのも小山であつた。

私生活の面でも、結婚式は海老名の司式で本郷教會で行つたし、伴侶となつた松井菊野も本郷教會の信徒であつた。

小山は、三沢・内ヶ崎・吉野とともに海老名門下の四天王<sup>(23)</sup>と呼ばれるほどに、海老名と親密な師弟關係を結んだ。

小山は後年「海老名弾正師の闊達雄大なる説教を聴かざらしめば、予は今猶ほ信仰の門外漢たりしやも知るべからず。海老名師は予が半生の精神的指導者なりき<sup>(24)</sup>」と記している。

小山のキリスト教受容は、学生時代からほぼ一〇年間は、海老名と本郷教會を中心にした品性の宗教に重点をおくものであつたといえる。

## 二 全人の生活から釈尊へ

### (一) 靈肉一如の全人生活

受洗後八年の一九一〇年に、それまでのキリスト教信仰が揺らぎ「予の信念は不知不識一種の地震に襲はれつゝありし也。予は依然として旧信仰を失はざるも、自ら旧信仰に満足し得ざるを感ず。何物か新たな衝動ありて生命の内部に蟠るを覚ゆ。予は今之をエツキスプレッスするを欲せず、又エツキスプレッスする能はず、且つ予の新しき信仰は畢竟未熟の果実のみ、未だ以て人に授む可からず。予は成熟の秋を待ちて、之を教兄に問ふの日あらんを楽しむ」と告白した。

一体何かあったのだろうか。小山の残したものには、この原因について直接にふれたものはない。筆者には二つの原因が考えられる。一つは、私生活における変化である。

私生活の変化として、第一に結婚生活における変化があげられる。一九〇七年に菊野と結婚し翌年には長女喜美子が誕生して順調な夫婦生活を送っていたが、やがて妻は病氣になり七年後には死去した。二人が夫婦として同居できた期間は三年ほどであり、ちょうどこの一九一〇年頃から妻の病氣による別居が始まった年である。前年の一九〇九年には「頭がよくて、兄思いの民吾の死は、まったく、東助をがっかりさせた」という弟の死を体験する。このような私生活上の出来事が、小山にこれまでの信仰生活の再考を促したといえる。

もう一つの原因は、当時の流行思想である自然主義思想に大きな影響を受けたことである。小山はすでにこの三年前の一九〇七年に「靈肉一如の人生観」を発表している。かれはこの論文で、靈肉の二元論が誤りであり、靈と肉・

心と物が一如でなければならぬ、靈魂だけが神のものであるのではなく、肉体も神の宮であると論じた。

小山は、信仰動揺の中で、この靈肉一如の思想をさらに發展させて、全人の思想にその解決を求めた。『新人』の一九一〇年八月—一〇月号には、三回にわたり「全人の生活を想ふ」<sup>(28)</sup>が掲載された。

全人とはどういうものであろうか。それは人間を靈と肉の一如觀から全き人と見ることである。

總て人間に付けるものは、神に付ける者と同様の価値ある者では無からふか、否、人間に付けるものは即ち神に付ける者、神に付けるものは即ち人間に付ける者、Humanity と Divinity とは本来和合す可きでは無からふか、更に推しつめて言はば、肉を外にして靈は無く、ヒューマニチーの中にこそデビニチーも存するでは無からうか。或る哲學者の言へる如く、Wholeness は即ち Holiness である、靈と肉とは別々に考へらる可きに非ずして、人は靈肉の此身その尽神の子の光榮を有つて居る、敢へて完人と呼ばぬ、全人即ち神子である、復た何処にか靈肉の抗争あらんやとは予が現在の解釈である。<sup>(29)</sup>

小山は、品性としての宗教であるキリスト教が、あまりにも靈を重視し肉を輕視していることに疑問を感じた。

酒・タバコは駄目。劇場に入ることも、虚偽を書いた小説を読むことも、聖書を題材としたものでない絵画を見ることも、賛美歌以外の俗歌を歌うことも駄目。<sup>(30)</sup>はたして、これらは肉欲として否定されなければならないものであろうか。いや、そうではない。肉欲も肯定されるべきものであるとした。

生の情味は、先づ五感の与ふる所を、享樂するに依りて解せらるべく、芸術、學問、遊戲、社交、其他一切の人文と自然との興味は、要するに此官能の開發を通して、始めて徹底し得べきなり。茲に豊富なる人生あり。文明の生活と稱するものは、畢竟肉の快樂と感ずる總ての要求を具体化し現実化したるに過ぎざるなり。此の人性を侮蔑して、肉の要求を罪惡視するは、是れ中世紀文明の殘滓を食める僧侶階級の迷信のみ。今の世に於て靈の値そも幾何ぞや、肉の權威は、當に個人と社会との主宰的地位に立つ可き者なり。生存と其の快樂との問題の前には、靈の命令の如き、忽ち青醒め果てなむのみ。<sup>(31)</sup>

小山は、この全人の思想により、あるがままの自己を靈肉ともに全面的に開顯して、人生美の華實を楽しむといふ<sup>(32)</sup>



ことで問題を解決し、動搖した信仰を取り戻した。

(二) 釈 尊 へ

小山は、一九一〇年一〇月発行の『新人』誌上で「願くは孰れの日か進んで更に具体的に此の要求を発露して見た<sup>(33)</sup>い」として、靈肉一如の具体的提示を予告した。しかし、かれのこの願いは果たされなかった。

一年後の一九一一年一月発行の『新人』では、小山は「予は仏陀より基督に往けり」と題する論文の冒頭で「筆を『新人』誌上に絶ちてより、茲に再び秋を迎へぬ。久闊を諸君に謝して、而して予は今何事を語るべき乎。思へば予は身も心も既に昨日の予にあらず、諸君に語るべき最初の詞は、先づ予が懺悔の一節なり<sup>(34)</sup>」として、かれが三回にわたって読者に示した全人の生活が「予に於て単なる理想の幻影なりき<sup>(35)</sup>」であったと告白する。

一九一〇年の一〇月から、一九一一年一月にかけて何があったのだろうか。「鼎浦小山東助氏年譜<sup>(36)</sup>」によれば一九一〇年一〇月に「病を獲て早稲田大学並に東京日々新聞退職」、十一月一日「肺疾の爲め茅ヶ崎南湖院第二病室に入院す」。翌年一月一日「デフテリアに罹り隔離室に移る」。七月「病勢輕快、退院して南湖院側魚民別荘にて静養す」とある。

一年余の病氣とその後の静養生活が、かれをして理想とした全人生活を再考させることになったのである。

理論上は、靈と肉は調和するはずであった。しかし実際には、肉の欲望を肯定してわかったことは、肉欲は「無限無際<sup>(37)</sup>」であり、「強烈なる性情<sup>(38)</sup>」を持ち、たとえ欲望を充足したとしても「悲哀と不満<sup>(39)</sup>」とが残り完全な満足が得られないということであった。

「難治の病を抱いて、発熱四十度に及べる時に於てすら、猶ほ世欲の爲めに煩はされて、精神の自由を失へるを歎

じたり<sup>(40)</sup>」という体験をするに及んで、全人の理想が実験を経ない単なる理論・知識上のものに過ぎなかったことを思ひ知らされる。

それゆえ「一切の生欲を肯定したる予は、一切の生欲の爲めに悩まされぬ<sup>(41)</sup>」ことになった。調和するはずであった靈と肉はかれの中で戦争を起こし「わが心は荒野の如くなれり<sup>(42)</sup>」という状態になり、ついには「信の高嶺の絶頂より、今しも扶桑主義の裾野に向つて転び落ちんとはしたりし也<sup>(43)</sup>」という危機的状态に陥る。

ここにいたつてかれは、官能的扶桑を超越した世界に救いを求めた。かれは、最大の欲望は肉欲のあれこれにあるのではなく「心が夫れ自ら内的に自由ならんとする解脱<sup>(44)</sup>」にあると結論づける。そして「解脱の要求を外にして、予は今何物も欲しからず<sup>(45)</sup>」の心境になり、この「解脱を願ふの志は、端なくも釈迦牟尼仏の生涯を、予が眼頭に髣髴せしめたり<sup>(46)</sup>」ということになる。

なぜ、小山は肉欲からの解脱を釈尊に求めたのだろうか。それは、釈尊その人が肉欲に悩み、心の自由を求めて、ついに解脱に達した人物であつたからである。かれは、仏教書に親しみ、釈尊のこともよく知つていた。

釈尊の出家前の生活は、まさに小山が全人の生活と称して理想とした肉欲充実の生活であつた。しかも釈尊はそれに満足できず肉欲の生活を捨てて、肉欲否定の道に入つた。

釈尊は生の歓楽を棄てゝ而して終に不滅の生を得たり、何処にか不滅の生を得たる、渴愛我欲の滅し尽したる処に於て之を得たりしに非ずや。解脱の第一要務は、確に我欲の滅尽に在りき。我欲を滅尽して始めて現身超絶無余絶対の不滅界に入る、釈尊は実に其实証者也。噫、是の如き正覺の聖者こそは、予が久しく思慕して止まざりし内的自由の証悟者に非ずや<sup>(47)</sup>。

小山は、釈尊に従い肉欲を否定し不滅の世界・解脱に至ることを決意する。かれは、病氣とその後の療養のなかで「努めて諸欲を放捨するの生活を営みつゝ、正座黙想、心静かなる朝夕を海辺と松林との間に過し<sup>(48)</sup>」た。

かれは幾度も自分のような多欲の者が、はたして釈尊のように肉欲を滅尽し解脱に至ることができるのか、と自問し思い悩む。しかし、いろんな肉欲の中でも最大のものである食欲・性欲・名譽欲・功利欲について、ひとつひとつ吟味した結果、滅尽できるといふ結論に達した。

久遠真実なる生の光明の前には、名譽も、功利も、肉の快楽も、総て死灰に均しきを感じ、且つは一切の欲其者が不滅の實在に對照し来れば、畢竟幻華泡影に過ぎざるを想ひ、先づ斯く知恵の證悟によりて、一切の生欲を空了したり。予は知恵の證悟を力として、幾多心海の波瀾を越え、益益諸欲滅尽の妙味を感じ、その心境を愛慕するに至りぬ。諸欲を滅尽して、心境淡々たり、欲の至体を我と言はば、既に諸欲を空了し諸欲の本源を空了したる今となりては、無欲境は即ち無我境なり。(中略)此心境に入りて始めて青天一碧、光明遍照の新しき世界に入る。こゝに新しき世界とは、煩惱を滅尽したる涅槃寂靜の靈覺真心なり、(中略)即ち是れ無為の世界なり。こゝに至りては單に諸欲の滅尽せるに止らずして、一切の意識も亦滅尽す。即ち余す所唯無記あるのみ默あるのみ。般若空觀の極致は畢竟こゝに在るべし。予は無欲境の觀想より進んで茲に直入し、松林靜座の間、幾たびか光明に触れ得たり。<sup>(49)</sup>

小山は釈尊に従い、肉欲を滅尽・解脱し涅槃に入り、ここに求めていた心の自由を獲得した。

### 三 久遠のキリスト教

#### (一) 釈尊よりキリストへ

小山は、釈尊に従い解脱・涅槃にいたったのだから、そこに救いは完成し、キリストに代わって釈尊がかれの救主になるはずであった。

しかし実際には、解脱・涅槃にいたった小山に見えたのは絶対者である神であり、キリストであった。決してキリ

スト教から仏教に改宗したということではなかった。

この心境・体験は、小山自身が理論的に説明するのは困難だし、多くの誤解を受けやすいところとしてしているので、記述することは困難である。

一応、ここではかれが「釈尊の踏み行きし跡を趁ひ、而して終に涅槃のただ中に、わが神を発見し得たる也<sup>(50)</sup>」とするその経緯を記すことにしたい。

小山が解脱・涅槃に到達できたのは、釈尊がその道を示し保証してくれているからである。とすれば、解脱は釈尊によるものであり「自ら解脱すと言はんよりも、釈尊の為に救はるといふの一層適切ななるに若かじ。げにも彼は正覚の真人、人天の師親なりと謂ふに止らず、吾等が心靈の救済者<sup>(51)</sup>」である。

ここまでくると、釈尊は歴史上の人物とか単に悟りを開いた人という域を越えた人物になる。「彼は法身の如来なり、如より来りし人、如として来りし人、人にして同時に超人、現在の人にして同時に久遠の人、彼を見る者は法を見、真如を見、無上涅槃を見、不滅界を見、現実世界の中に内在して、且つその上に超越せる最高実在を見る者なり<sup>(52)</sup>」。

小山は、釈尊の示した解脱・涅槃を求め、釈尊を仰ぐ中に、釈尊が神を見る者であることを知り、涅槃の中で小山自身も最高実在である神を見たのである。

涅槃に入り、神を見「予は『わが神よ』と叫びし時、然り、信に入りてこゝに始めて心の奥の底なき深みより新に神を見出せし時、純真無垢の『われ』てふものが靈彩爛然として生れ出で、光瀾の中に遊泳するを覚え<sup>(53)</sup>」た。

この見神の実験を経て、改めてイエスによって救いが完成された、という体験をする。

正覚の中に神を見るの一大消息に触れて後ち再びナザレの耶穌を顧みるや、端なくも其神彩に撲たれて、十有余年未だ嘗つて

逢はず、釈尊に於てすらも見ざりし光りを鮮かに耶蘇の人格に認め、茲に至りて全く救はれたりとの確信を生じたる者に候、即ち釈尊に於て新に救はれたりと感じたる小生は耶蘇に於て救ひを全うせられたりと感じたる者に候。全き救ひは耶蘇に在り耶蘇は小生の最大なる救主に候。<sup>(54)</sup>

小山にとっては、釈尊が人より神に至った者・人の最高代表者であるのに対して、イエスは神より人に至った者・神の唯一なる化身、神の独子である。それゆえ「神にして人たる耶蘇にも優して、尊く善き者は此世にあらず。即ち知る人類の最大幸福は神と耶蘇基督とを知る是れ也。久遠の福音こゝに在り」<sup>(55)</sup>と断言する。

## (二) 久遠のキリスト教

小山は、二高の学生時代に本格的にキリスト教にふれてから十数年、上記のような変遷を経てここにキリスト者としての確信を得て、『久遠の基督教』を著した。

この著書は「緒説」と「本論」からなり、「本論」は「前編・耶蘇の福音」と「後編・福音の真髄」の二編からなる。

「緒説」は、キリスト教信仰の確信にいたるまでの経過を記したものであり、「本論」ではその確信の視点からキリスト教を論じる。

「本論前編」の冒頭では「予は全人より釈迦に往き、釈迦より終に耶蘇に帰りぬ。耶蘇は果して如何なる人ぞ」<sup>(56)</sup>と述べてイエス論を展開する。

前編においては、イエスの人格・生涯が福音であり、とくに「万民に与へたる最大の恩賜は、神の国の福音にてありき」<sup>(57)</sup>として、「神の国」思想を中心に展開する。

かれは、イエスの神の国は靈的・精神的・内的なものであることを強調する。これは一度は靈肉一如に理想を見ながら、それが破れ、肉を否定して靈的・精神的・内的自由によって救いにいたったことを踏まえたものであることはいうまでもない。そして神の国についてはこのようにむすんでいる。

予は神の国の真髓を解して、靈的生命、即ち神を主として之に仕ふる心靈の王国なりとし、耶蘇の人格に於てその極致を発見し得たり。而して聖書に現はれたる神の国の思想は、皆此本義に帰一し得べき事を語れり。然らば神の国の義即ち其法則とは如何。曰く神を愛し隣を愛すべしとの戒是れ也。而かも此戒の奧義は天父の完きが如く完かるべしてふ最高原則に存す。如何にしてか天父の完き慈愛を知るべき。曰く、耶蘇の教訓を聴き、耶蘇の品性を見、耶蘇の生涯を学べ、神の国の法則は耶蘇其人に現はれたり。既に福音の真髓たる神の国と其義とを耶蘇の人格に見出し得たりとせば、耶蘇は即ち福音なりてふ、天来の恩寵、不滅の真理は、直ちに明了す可きなり。是れ実に本書の眼目にして、基督教の信仰は、此一義を根本とする者なり。<sup>(58)</sup>

「本論後編」の「福音の真髓」では、はじめに小山が肉欲を離れて靈的自由を求めて、積尊にいたりまた再びイエスに戻るきつかけとなったものは山上の垂訓の「心の清き者は福なり。其人は神を見ることを得べければ也」の一節であったことが紹介される。かれはキリスト教にふれて十数年この聖句を愛読しておりながら、真実の意味を理解できないでいた。かれは「世と絶ち人と離れて、静かに病臥せる時すら、猶ほ且つ神の事よりも財の事を想ひ、靈の事よりも肉の事を思ひ、之がために精神の自由を失ひぬ<sup>(59)</sup>」という「生きながら地獄を見たり」という煩悶のただ中で「心の清き者は福なり<sup>(60)</sup>」の聖句を思い起こす。

予は此聖訓によりて、忽然眼を開かれ、罪の子の意識より、新に神の子の意識に一超直入し、こゝに聖靈を享け、神を見る人に逢ひたる者なればなり。<sup>(61)</sup>

とし、次いでかれは「天父」「聖靈」「基督」論を展開する。

天父・聖靈論にも興味深いものがあるが、スペースの関係でここでは「基督」論を紹介するにとどめたい。

小山によれば、イエスが神である証拠は奇跡・処女降誕・復活にあるのではなく、その人格と生涯とにある。

耶蘇の人格と生涯とは、神の最高性質の顯現たるにあらずや。此意味に於て、然り此意味に於てのみ耶蘇は神也。神の最高性質とは何ぞや、愛即ち是れ。而して愛こそは耶蘇の人格に於ける根本性質にてある也。否、愛こそは耶蘇の人格に於て始めて活ける力となり、現実の生命となりたる也。<sup>(62)</sup>

耶蘇はその深く鮮かなる神人和合の意識に於て、ヒューマニチーの中にデウキニチーを煥発すると同時に、その意識の奥より湧き出づる愛に由りて、罪人を神の心に結び、デウキニチーの中にヒューマニチーを摂取したり。故に予は確信す。耶蘇はその死に由らず、その生によりて既に明かに其最高の性質と靈能とを顯現し給へりと。<sup>(63)</sup>

かれが『久遠の基督教』と題して論じたことは、イエスがこの世にもたらした福音は神の国にあり、しかもその神の国はイエス自身の人格と生涯に現れているので、イエスその人こそ福音そのものであるということであった。「久遠の基督教とは何ぞや。耶蘇は即ち福音なりとの一義を宣伝する即ち是れ也」<sup>(64)</sup>ということになる。

### (三) イエスと釈尊

小山にとって、イエスと釈尊はどのような関係にあったのだろうか。

前述のように、かれは釈尊によって救われ、イエスによって救いが完成したと述べられる。また「釈尊こそは人よりして神に至れる者、耶蘇こそは神よりして人に至りし者」<sup>(65)</sup>さらに、人生の根拠としての超越の世界を「予はその半ばを釈尊に学び、全きをナザレの耶蘇に学びぬ」<sup>(66)</sup>と述べる。

小山の宗教思想において占める二つの中心がまさにキリスト教と仏教であり、イエスと釈尊の二人の人物であった。

幼い時の宗教体験は仏教であった。二高の学生時代には、仏教研究会の熱心なメンバーと仏教論を戦わせたこともあった。大学時代は専らキリスト教に専念したが、その間にもキリスト教のみを真理とする排他的な信仰ではなく、仏教にも関心を持ち、『新人』への寄稿家である綱島梁川のキリスト教と仏教の調和・統一論にも大きな関心を寄せていた。

弟の死に際しては、仏僧・島地大等を自宅に招いて読経をして貰っている。島地大等は島地黙雷の娘篤子の婿で小山の友人島地雷夢の義弟にあたる人物であった。

大等は東洋大学で仏教哲学を講じる学者でもあったので、小山はかれから仏教や釈尊の解脱について聞くことができた。小山が病気で入院するとただちに駆けつけて見舞うなど、親身になって小山に接した人物であった。<sup>(67)</sup>

小山が記しているところによると、かれはかねてよりたびたび釈尊の伝記や金剛経を読み、仏教教理についての知識もあるとのことなので、一通りの仏教知識や釈尊の生涯と教えについては、知っていたようである。<sup>(68)</sup>

とくに病氣静養中の一年余は、仏教とくに釈尊の生涯について、姉崎正治『根本仏教』（一九一〇年）に啓発されて、多くを学んでいる。<sup>(69)</sup>

霊肉一如の全人の生活に破滅していた時、小山に肉欲を「滅尽して始めて、その奥に光顯する實在其者こそ吾等が最高の価値を置くべき不滅の世界なり本体なり生命なり、（中略）生の一味に徹せんと欲せば、須らく現実の生其者を超越せよ<sup>(70)</sup>」と啓示したのが釈尊であった。

かれは釈尊に導かれて、肉欲・煩惱を滅尽し解脱・涅槃に入り、救われたとの確信に到達した。にもかかわらず、なぜ涅槃にとどまらず再びイエスに戻ったのだろうか。

海老名が『久遠の基督教』を批判したのもこの点にあった。



著者は仏弟子となつて、始めて救はれた人である、耶穌は彼れの教主ではない。著者は救はれた後、始めて耶穌の神を見たやうである。耶穌は著者の教主にあらずして、理想の人である、(中略)吾人は著者が、耶穌に由て救はれ得なかつたことを遺憾に思ふと同時に、彼は何故にその教主釈迦を去つて耶穌に來たのであるかを怪しまざるを得ない。彼が釈迦に救はれ、無為涅槃のただ中に於て、明かに本地の風光を見たる時、何故に久遠の仏よと叶ばなかつたのであらう。

この海老名の批判に対して「釈迦より耶穌へ推移したる小生の心理状態が、拙著に於て著述甚だ不充分なりしが故に、先生並に読者一般が斯く推断せらるゝは無理ならぬ次第に候ふべし」と断り、その後で「釈尊の踏みし道を辿りて涅槃の中に神を見たりしといふ其瞬間迄の小生は『全く仏教的』なる実験を経たる者に候ひしならん。されど夫れより一転して耶穌の神彩に触れ、保羅の所謂『耶穌基督の顔に在る神の栄光を知り』て始めて全く救はれたるの自覚に入りし小生は、果して『基督に由れる解脱』を実験したる者に候はざるか」と反論し、その過程は西洋のキリスト者と異なるがキリスト教信仰そのものは決してかれらと異なることがない伝統的なものであると主張する。

そして、釈尊で救われたものの、その救いが完成したという実感が得られなかつたのは、生の肯定・充実という点でイエスが釈尊に優っていたからである。

信仰上の仏陀と基督とは、その最高性質に於て、殆んど全く一致融合するに似たるも、其源流に溯れば、歴史上の釈迦と耶穌とは、半ば相似て半ば相異り、ヒューマニチーに対するの愛は、釈迦よりも遙かに耶穌に於て最も顯著なるを見ると。

予は釈迦によりて彼岸の悦楽を知れり。而して再び耶穌に歸りて、此世に神の光榮を耀すの更に崇高なるを想へり。予は釈迦と共に久遠の故郷に歸りたり。而して再び創造の世界に來りぬ。

## むすび

小山はキリスト教受容の過程で「第一に近代思想の感化を蒙り、第二に東洋意識の圧迫に遇ひぬ。予は此二大思潮に盲目なる能はず<sup>(76)</sup>」ということで、「キリスト教と自然主義思想」「キリスト教と仏教」の統一・調和に真剣に取り組んだ。

とくに仏教との調和に腐心した。かれは、聖書・キリスト教が余りにも西洋人の意識・視点から説かれているので、日本人として満足できないでいた。それに対して仏教は、長年にわたって日本人の意識を育成してきているので、この仏教を通してキリスト教の再理解が必要だと考えた。そのことを痛感したのは肉欲問題で苦しんだ時であった。

自然主義思想・肉欲問題で行き詰まり、肉欲からの解放・解脱を求めた時に、肉欲否定の思想はキリスト教にもあるにもかかわらず、かれにとってもっとも説得性があり効果的なものは釈尊の教えであった。かれはこのことは自分にもあてはまるのでなく、仏教的伝統に親しみ育まれた多くの日本人にもあてはまるものとしている。

小山におけるキリスト教と仏教の関係は、キリスト教を捨てて仏教に行き、また仏教を捨ててキリスト教に戻ったという単純なものではない。仏教にもキリスト教の真理に通じるものがあり、仏教を通してキリスト教の真理がより明確になるというものであった。それゆえ、キリスト教信仰の確信に達したのちにも仏教や釈尊はかれにとって重要なものであった。

予は決して仏教を通過し終れる者には非るなり。予は未だ嘗つて一たびも斯く明言せず又斯く思惟せず。否、予は今後益々仏陀が正覺の華実を味ひて、予が基督に対する信念を涵養せんと欲する者なり。予は仏陀と基督との間に一味の会通を見出し得た

り。而して基督中心の宗教が此一味の会通によりて永遠に靈的交渉を仏教の真理と開けるを思へり。少くとも予一個人に於ける晩近の新しき発見はこゝに在り。予は誤つても新しき宗教を發明したりと思はず、只予は此の一路を発見し得て、自分の信仰上大なる光明を得たりと言ふのみ。

このような小山のキリスト教と仏教を融和させる立場については、キリスト教界からは仏教的にキリスト教を解釈する者とみられ、仏教界からはキリスト教的に仏教を解釈する者とみられた。

かれは、この批判に対して思想的・神学的に答えたいと望みながらも、その機会を得ないままこの世を去った。

# 註

- (1) 内ヶ崎作三郎「『久遠の基督教』に題す」鼎浦会編『鼎浦全集』第二卷、鼎浦会事務所、一九二五年、二頁参照。
- (2) 同書、二頁。
- (3) 同書、六頁。
- (4) 「予をして強弁せしめよ」『鼎浦全集』第二卷、五〇〇頁、『久遠の基督教』警醒社、一九二二年、一〇〇頁、参照。
- (5) 『久遠の基督教』一〇〇、一〇一頁。
- (6) 同書、二頁。
- (7) 栗原基『ブゼル先生伝』ブゼル先生記念事業期成会、一九四〇年、三〇八頁では、「二高基督教青年会忠愛之友倶楽部は、明治二十三年創立」となっているが、大井胤治『光炎―鼎浦小山東助伝―』世界文庫、一九六七年、三四頁では「二高には明治二十五年から、キリスト教研究のための『忠愛之友倶楽部』という団体があつて」とあり、創立の年代が二年違ふ。筆者は、栗原は「明治四十三年四月三日、倶楽部の創立二十周年記念祭」が開かれた事も記しているし、何よりこのクラブに直接関係のあつた人物なので彼の説に従つて明治二十三年を採用した。
- (8) 『ブゼル先生伝』三三〇頁、『光炎』三三頁参照。
- (9) 『ブゼル先生伝』三四三、四頁。
- (10) 同書、三四四頁。

(11) 同書、三四四頁。

(12) 同書、三六三頁。

(13) 同書、二七〇頁。

(14) 同書、三四〇頁参照。

(15) 『光炎』四一—四三頁参照。

(16) 「明治三十三年の秋に我の生涯に取つ記憶すべき事がある。それは三沢糾氏と懇意となったことである。竹崎八十雄氏が渡米の途中東京に立ち寄り、我に告げて三沢糾といふ男は御為めになる男である。信任すべき人であるといつた。明治二十九年の夏、我は日向高鍋の三沢氏宅に於てその父上より此青年に紹介された事を記憶する。大分暑い時であつたが、夕暮その父にまねかれてその家の馳走になつた。未だ糾君が中学を卒業したばかりのやうであつたが、実に愛すべき純良の青年であると思つた。この青年が熊本の高等学校を卒業して、明治三十三年の秋、東京の帝国大学に入学して、我の右手とならうとは思はなかつた。此の三沢君が新人を背に負ふて起つたのである。この時よりして新人に目口鼻が出来始めた。三沢氏が大学青年会の寄宿舎に於て、熱心に此雑誌を経営し、特に我が教壇の筆記に従事したのである。その熱心を見て、内ヶ崎、小松、小山、栗原等の諸氏が手伝ひをする氣になつた。是等の新しき分子が加つたので、新人は頓に力を得たのである。三沢君はまた教会の為めにも力を加へて呉れた。従つて我が教会には大学生も頓に増加した。」(海老名弾正「伝道三十年」『新人』一五卷七号、一〇六、七頁)。

(17) 「信仰婦一の確信」『新人』一一卷四号、六五頁。

(18) 太田雅夫「本郷教会の人びと」(同志社大学人文科学研究所編『新人』「新世界」の研究)二二一頁。

(19) 「久遠の基督教」一〇頁。

(20) 「予が著述の精神を明かにす」『新人』一三卷四号、五五、六頁。

(21) 「久遠の基督教」一〇一頁。

(22) 『鼎浦全集』全三巻は、もともとは全六巻三、〇〇〇頁で小山の全著作を網羅したものであつた。ところが、刊行直前に關東大震災で原稿を焼失してしまい、三分の三巻一、七二〇頁で刊行された。西田耕三編『鼎浦小山東助の思想と生涯』鼎浦小山東助顕彰会、一九七七年には、『鼎浦全集』で抜けているものが幾つか収められているが完全ではない。本稿は「新人・新女界の研究」関連の原稿ということもあり、「注」の後に小山が『新人』『新女界』に執筆したものを掲載した。

- (23) 『光炎』一二二頁参照。三沢が抜けた後は吉野・内ヶ崎・小山・加藤直士が四天主とされている。『基督教世界』二九二八号、三頁参照。
- (24) 『久遠の基督教』二、三頁。
- (25) 「信仰婦一の確信」六四頁。
- (26) 『光炎』一六六頁。
- (27) 『新人』八巻一一号。
- (28) 「全人の生活を想ふ」一一巻八号、「樂園現前の消息(再び全人の生活を想ふ)」一一巻九号、「最深最奥の要求」(三たび全人の生活を想ふ)一一巻一〇号。
- (29) 「全人の生活を想ふ」四一頁。
- (30) 『久遠の基督教』一一―一三頁参照。
- (31) 同書、一五、六頁。
- (32) 「予は仏陀より基督に往けり」『新人』一二巻一一号、一二頁参照。
- (33) 「最深最奥の要求」一一五頁。
- (34) 「予は仏陀より基督に往けり」一二頁。
- (35) 同書、一二頁。
- (36) 『鼎浦全集』第三巻、二、三頁。
- (37) 「予は仏陀より基督に往けり」一四頁。
- (38) 同書、一四頁。
- (39) 同書、一四頁。
- (40) 『久遠の基督教』七七頁。
- (41) 「予は仏陀より基督に往けり」一四頁。
- (42) 『久遠の基督教』一七頁。
- (43) 同書、一六頁。
- (44) 「予は仏陀より基督に往けり」一五頁。

- (45) 『久遠の基督教』六六頁。
- (46) 同書、六七頁。
- (47) 「予は仏陀より基督に往けり」一七頁。
- (48) 『久遠の基督教』七六頁。
- (49) 「予は仏陀より基督に往けり」一八頁。
- (50) 同書、二二頁。
- (51) 同書、二〇頁。
- (52) 同書、二〇頁。
- (53) 同書、二二頁。
- (54) 「予が著述の精神を明かにす」五四、五頁。
- (55) 「予は仏陀より基督に往けり」二二頁。
- (56) 『久遠の基督教』一〇五頁。
- (57) 同書、一〇八頁。
- (58) 同書、二〇一、二頁。
- (59) 同書、二〇五頁。
- (60) 同書、二〇五頁。
- (61) 同書、二一九頁。
- (62) 同書、三六三、四頁。
- (63) 同書、三六九、三七〇頁。
- (64) 同書、二〇一頁。
- (65) 同書、一〇三頁。
- (66) 「眼を開け」、『鼎浦全集』第二卷、三〇七頁。
- (67) 『光炎』一九五頁参照。
- (68) 「予は仏陀より基督に往けり」一六、一九頁参照。

- (69) 「予が著述の精神を明かにす」五六頁参照。
- (70) 「死の一線を超えたる生の宗教」『鼎浦全集』第二卷、二八四頁。
- (71) 紫海「小山氏の『久遠の基督教』を読む」『新人』一三卷三号、八五、六頁。(紫海は海老名のペンネームの一つ)
- (72) 「予が著述の精神を明かにす」五六頁。
- (73) 同書、五七頁。
- (74) 『久遠の基督教』三六六頁。
- (75) 同書、三九四頁。
- (76) 同書、三頁。
- (77) 『鼎浦全集』第二卷、五〇二頁。

表1 『新人』に掲載された小山東助の著作

年	巻・号	ペンネーム及び著作名	
1901	1-12	幼天鵲「行く春」	幼天鵲「青年詩人白星に与ふ」
	2-3	幼鵲子「草雀小啼」	
	2-4	白芙蓉「鳥羽絵」	たなじく「秋海棠」
	2-5	汀鷗生「断片録」	白芙蓉「『落梅集』と『行く春』」
1902	2-6	白芙蓉「冬の感想」	
	2-7	(無署名・社説)「国民的理想」	
	2-8	白芙蓉「吾が哀歎」	白芙蓉訳「詩篇小論」
	2-10	白芙蓉「春雑筆」	蟹の子「さざなみ」
	2-11	蟹の子「袖中消息」	里の子「春風吟」
	2-12	汀鷗「隣人(ヂッケンス)」	里の子「青笠雑吟」
	3-3	白芙蓉「楽天家の秋」	里の子「夕雲静かに」
	3-5	里の子「秋思」	里の子「初冬」
1903		汀鷗生「婚約(マクス、ミュラー)」	汀鷗生「落葉録」
	4-1	汀鷗生「邂逅(エドナ、ライアル)」	
	4-3	汀鷗生「残雪録」	
	4-4	鼎浦生「松井夫人の日記を読む」	鼎浦生「文学雑評」
	4-7	汀鷗生「予言者の面影」	
	4-10	蟹の子「旅路」	
1904	4-12	蟹の子「小洵が浜の秋思」	
	5-3	鼎浦生「超戦争観」	
1905	6-1	白芙蓉「琴と葡萄と鳩」	鼎浦生「小泉八雲の怪談を読む」
	6-5	小山東助「朝鮮同化論」	
	6-6	小山東助「朝鮮同化論」(承前)	
		鼎浦生「夏期学校の新紀元」	
		鼎浦生「何故に女学生を軽蔑する乎」	
1906	6-9	鼎浦生「天下の風教を如何」	鼎浦生「社会改良の将来」
	7-1	鼎浦生「日韓関係の新紀元」	鼎浦生「朝鮮に対する罪惡」
		鼎浦生「万国青年会の創立者」	鼎浦生「新紀元党の旗色を評す」
		鼎浦生「高山樗牛の書翰」	鼎浦生「池卓雨郎の詩集を読む」
		鼎浦生「予言者か宗教狂か」	
	7-2	鼎浦生「亜細亜精神の復活」	鼎浦生「東遊の英国説教家」
	7-9	鼎浦漁史「文豪ゾラ」	小山東助「国際平和の理想」



小山東助のキリスト教受容

	7—10	小山東助「時代を超越するの道」
	7—11	鼎浦生「雨奇晴好録」
	7—12	鼎浦漁史「婦人の新理想」
1907	8—3	鼎浦生「基督教界の新傾向」
	8—5	鼎浦生「仏教徒に警告す」 鼎浦生「国民史上の人物観」
	8—9	鼎浦漁史「吾等は懐郷病者なり」 小山東助「遺伝の勢力」
	8—10	小山東助「筑山正夫君を悼む」 鼎浦生「基督教文学者に望む」 鼎浦生「基督教界は何処に向つて精力を集中す可き乎」
	8—11	小山東助「靈肉一如の人生観」
	8—12	「小山東助氏の『信の悦』（秋期伝道会での講演要旨） 鼎浦生「挿画解題」 鼎浦生「悪風汚俗と基督教」 鼎浦生「文芸美術と基督教」
1908	9—1	鼎浦生「加藤君の新著を読む」
	9—3	鼎浦生「伝道上の軍略と戦術」
	9—4	鼎浦漁史「親と子」 小山鼎浦「帝国建設者の宗教」（セシルローズが半面の性格）
	9—5	鼎浦生「宗教家と時代精神」
	9—6	鼎浦漁史「女性美の好典型」
	9—7	鼎浦生「教育家宗教家の社会的地位」
	9—8	鼎浦生「道徳観念の動揺と外来思想の消化」（社説） 鼎浦漁史「木下氏の近業を読む」（小説乞食の観想）
	9—9	鼎浦生「吾人の儒教復興観」（社説）
	9—10	鼎浦生「基督教思想発展の新方面」（社説） 小山生「松村氏の新著を読む」
	9—11	鼎浦生「現代的福音とは何ぞや」（社説）
	9—12	鼎浦生「個人的救済と社会的革新」（社説） 鼎浦生「木山君の『希望の青年』を読む」 鼎浦生「一批評家に答ふ」
1909	10—1	鼎浦生「文明史上に於ける日本クリスチアンの地位」（社説）
	10—4	鼎浦「韓国伝道を如何す可き」 鼎浦「国土魂を発揮せよ」
	10—7	鼎浦漁史「進化論と基督教」
	10—9	小山鼎浦「斎藤信策君を憶ふ」（上）
	10—10	小山東助「斎藤信策君を憶ふ」（下）
	10—12	鼎浦漁史「木山学士の『国勢と教育』を読みて」
1910	11—3	小山東助「現代思潮より宗教へ」
	11—4	小山鼎浦「信仰帰一の確信」

	11—6	鼎浦生「内ヶ崎君の新著に就て一敢て『人生と文学』を推薦す—」
	11—7	鼎浦漁史「中村春雨氏の新作『牧師の家』評論」 鼎浦生「再び『人生と文学』に就て」
	11—8	小山東助「全人の生活を想ふ」
	11—9	小山鼎浦「樂園現前の消息」（再び全人の生活を想ふ）
	11—10	小山鼎浦「最深最奥の要求」（三たび全人の生活を想ふ） 小山東助「新人十年史の断片」
1911	12—11	小山鼎浦「予は仏陀より基督に往けり」
1912	13—2	小山東助「イエスの人格の宣伝」
	13—4	鼎浦生「予が著述の精神を明かにす」（海老名先生の御批評に答へて）
	13—5	小山鼎浦「死の一線を越えたる生の宗教」
	13—10	小山鼎浦「先づ自己に徹底せしめよ」

表2 『新女界』に掲載の小山東助の著作

年	巻・号	ペンネーム及び著作名
1909	1—1	鼎浦漁史「湘南の春」
1911	3—2	小山東助「現代小説雑話」
1914	6—4	小山鼎浦「眼を開け」（巻頭言）
	6—6	小山鼎浦（祈禱は人の靈魂を……）（巻頭言）
	6—12	小山東助「菊野の日記帖より」
1915	7—12	鼎浦漁史「歌集夕ばえの著者へ」
1917	9—7	小山東助「婦人問題の一片」

（ペンネーム、無署名の著作を小山のものとするにあたっては、『鼎浦全集』第三巻の「鼎浦小山東助氏著作総目録」を参考にした）